

者が認めない、実利主義の浸透を受けている。

プロレタリアートの定義でも、バンネコックは、彼の時代を越えていないし、限られたプロレタリアについての観念しか持っていない。彼の労働者は、今日の第三次産業の労働者や技術者を含んではない。

しかしながら、他の分野では、彼は驚くほど現代的な、かつ予言者の考えを伝えることができた。彼は（すでに一九四七年以

特集 自治管理・労働者評議会

自治管理と新社会

一、輕蔑の拒否

現在少くとも自治管理には二つの経験が存在する（1）。多分異常なものではあるが、しかし模範としての価値を持つものである。二つともに、周囲から無関心のみならず、敵意を受けている。それはほかの社会主義諸国の埒外にあり、長い間それらの国ぐにの敵意的となっていたユーゴスラヴィアの経験であり、更に自由主義諸国の工業生産における協業の、ずっと限定された、知られていない、あるいは誤解されている経験である。

ユーゴスラヴィアの自治管理は二十年ばかり前に、ソヴェト型

来！）直接行動、山猫ストライキ、工場占拠について語っているし、彼が主観的な要素（意識、意志……）に留保した位置は、現在の左翼急進主義者の観念に完全に結びついている。

殊にバンネコックは、「労働者の解放は労働者自身の仕事である」という言葉を完全に達成するよう理論を構築しようとした故に、《今日の》である。そのため、彼の思想は現在進められている討論の中心にある。

アルベール・メエステル

三木 明 訳

を真似た独裁的な計画化の時期に引続いて始められた。労働者たちに管理されているにもかかわらず各企業は、計画化機構の中に組入れられていて、その機構は、最近数年間は無活動状態にあるものの、国家投資、新経済活動の指定、雇用政策については依然として至上権を持っている。そして税制のおかげで、公権力は各企業の投資を方向づけることができ、殊に投資と分配（賃金、個人的な特別手当、従業員全体の労働条件改善）との間の配分の鍵を握っていることができる。

したがって中央の計画が命令的でないだけ、公権力が干渉的でないだけ、自治管理の経験は各企業、各工場總會、または労働者集団の中で一層現実的なものとなり、実際に諸決定に力を加えることもできることが理解される。反対に中央の計画が命令的であればあるだけ、自治管理が自己を活かす可能性が少なければ少ないだけ、企業のための根本的な諸決定はますます外部の命令の対象となる。極端な場合、自治管理はいかなる力をもはや持たなくなるから、全く意味を持たなくなる。

さてユーゴスラヴィアの二十年にわたる経験は、自治管理企業への諸決定の地方分権化と、その中央権力と計画とによる再把握との間の絶えない振子の運動をわれわれに示している。地方分権化の諸時期は、特に賃金の増加と企業利益の分配の諸形式によって、(しばしば低い生産性と呼応する)各企業内の雇用の増加によって、そしてより一般的な面ではインフレーションによって目立っている。

それらの時期には必ず、中央権力の再強化の時期、計画の強制の再確認がつづいた。時には手直しされる必要があったのは計画そのものであった。というのも経済計画について、總會の簡単な決議ですませるといふ地方分権化の時期も見られたからである。それらの期間中、重大な闘争が企業内の無用な職員に対して、官僚主義に対して、分配の誤ちに対して企てられた。最後には労働者の集団や總會は何一つ決定するに及ばなかった。それでチト大統領は各企業の経理上の自治の不在にふれながら、企業が自由に処理できる《一種のポケットマネー》をやはり残しておかねばならないことを宣言するにいった。そして独裁的な各時期は、

労働者の各種要求によって特徴づけられたことをつけ加えておこう。それらは当時爆発的な性格を帯びていたのであって、局限されたものではあったが、最近のフランスにおける工場占拠と類似がないわけでもなかった。どこでも労働者の可能性のない異議申し立ては反乱に通ずる。

しかしながらストライキへの突入は簡単に行われたのではなかった。中央の計画による命令の自分たちの企業への適用に関する諸決定について、労働者たち自身に責任を持たせることを可能としたことは、自治管理の功績の一つであった。そうして国民的な発展に対して必要な犠牲を大衆に対して承知させもしたのである。平常の時期においては、振子はその振動のどちらかの極端によることもなく事態は程よく推移した。企業の下部と指導部とのコミュニケーションは、各企業と計画との間と同様に、正しく働いた。しかしその平衡は不安定なものであり、労働者階級と中央指導の専門家との間の緩衝材としてイデオロギーが果たしたきわめて重要な役割にもかかわらず、平衡の状況は長くはつづかなかった。

全国的計画については結局、自治管理経済の中においてすら、労働者の要求は本質的にはよりよい生活、より高い賃金、一口でいえば分配にあったことを忘れぬことが適切であろう。労働者の要望が自治管理の組織の中で明らかにしたもの、それは企業利益のより大きな部分を受けとろうとする彼らの意志である。しかしそれがすべてではなかった。自治管理者たちはより以上の賃金のみを望んだのではなかった。彼らはより少ない労苦、よりゆるやかな労働密度、討議し、理解し、決定する時間を欲したのであった。

それらすべては不可避的に生産性の低下をもたらす。過剰な雇用の創出、説明集会のためにすごされる生産にとって無用な時間、生産投資を犠牲にして実現化された共同消費のための設備づくり。中央権力が再強化された時期ですら、権力は企業における要員を抑える力がなかったことが確認されている。というのも（決定を委されている）自治管理当局者とそれが発展させた労働者の友愛とは、仲間の解雇に反対したからである。

ユーゴスラヴィアにおける経験が、中央の計画に関連しての自治管理の困難性を示したとすれば、フランスにおける協業の経験は、計画にもとずかない、自治管理の別の様相を明らかにした。

なぜなら、それらの企業は自由な環境の下での共同所有と共同管理の細胞だからである。周知のように、生産協同組合の創設には二つの流れがある。第一のものは、十九世紀後半の協同組合主義運動から生れたもので、強固な伝統と当時の職業的称号との基礎の上になりたっている。それらのうちの大半は土木建築にかかわるものである（2）。第二の流れは（ナチスドイツからの）“解放”から始まる。それは一般的に労働者ではない人びとによって創始され、推進された、労働共同体を生んだ（3）。一般に中小企業であるこれら二つの型の協同組合は、約五百を数える。それらは三万の労働者を結集しており、その大半は全くないしほとんど資本主義化していない第二の分野に属している。

自分らの生産品の販売機構の中に再組織されている若干のものをのぞいて、それらの企業は生産ないし市場についての行動を方向づける外部の干渉も計画もなく、孤立化している。そこではしたがって自治管理はユーゴスラヴィアにおけるように抑制される

こともなく、バランスをとる上からの運動を知ることなかった。結局そうした外からの刺激がないので、フランスの協業企業は、次の二つの形にわかれている。

①活動的ではあるが、共同提携者たちの管理への参加を促進させることをあまり気にしない管理者たちが、次第に雇用主に転化しつつある企業。労働者たちの、あるいは彼らのうちの一部の人がとの共同所有であるにもかかわらず、一種の私企業となっている協同組合。

②他の企業は反対に労働者の参加と友愛を発展させた。それらはしばしばきわめて緊密な小さな集団としてとどまっております。ここではグループの心理的結合が大きき増大ないし膨張政策が不可避的にもたらす人間関係の緊張に反対している。

ユーゴスラヴィアにおけるように、もとより同じ企業内のそれらの傾向の、どちらか一つの勝利が時期によってみられる。だが一般的にいつて、それらのうちのごく僅かのみが、自治管理組織が必要とする参加と、一《支配人》によって指導される企業の活動力とを、両立させたのであった。

その代りに、協同組合の型がどうであれ、調査の結果は満足すべき労働の雰囲気があることをわれわれに示している。どこでもきわめてすぐれたものだとはおそろくいえないが、しかし同種の私企業に比べれば多分いずれもよりよいものである。少くとも質問を受けた労働者たちによればそうなのであって、これは重要な点である。というのも、私の信ずるところでは、ひとり参加の組織のみがそうした雰囲気を可能にするからである。労働者の総会があまりたびたびは開かれないにしても、あるいは受身なも

のであるにしても、管理者とその仲間たちが実際には決して変革されていないにしても、人間関係はよりよいものであり、あまり緊迫はしていない。人びとはそのことを活用はしないにしても、責任者たちを変えうることを知っているのであり、責任者たちは周期的に自分たちの見解を労働者たちの見解と対照しなければならぬのである。このコミュニケーションのバイブは異議の余地のない成果をもたらしている。それは輕蔑を許さないのである。そして私は、最近の工場占拠を通じて労働者たちは、特にこの輕蔑に対して抗議したのだという人びとに、賛意を表するものである。

確かにユーゴスラヴィアの自治管理と全く同様に、協業の自治管理は、フランスにおいて生産性の欠如になやんでいる。そこでは合理化はよそよりも逸早く労働者たちの反対に出会っている。そこで生産の時間を抑えることはよそよりずっと難かしい。多忙な幹部たちから集会が時間を奪っている。それらすべてはアメリカを模範とする勤勉な生徒たちに受入れられるものではない。しかし企業管理にはアメリカ型しかないのであらうか。効率だけが現代のと称する文明の唯一の価値なのであろうか。

一方、自治管理に反対する決まりきった批判は、ここ数年来きかれてきた。そしてすでにかなり進められた諸研究の果てに——EEC共同市場が中小企業の将来を圧迫するという脅威を考慮に入れて——（その四分の一は株式会社である）五十近くの企業が新しい共同組織に移りつつある（4）。それは孤立した企業が（業務指導、予算、情報、投資の一般対策、幹部の雇用対策、法務・税務業務、PRなどの面で）十分に果すことのできない役割を保

証することとなる。自由主義制度の中であるにもかかわらず、参加の生き生きとした組織を試験管の中で実際に維持しうるには、自治管理は市場の圧力を受けすぎている孤立した企業の仕事ではありえないことを、それらの企業は認めなければならないのである。

そして問題は、最近の事件にいたるまで参加を忘れていたように見える社会の中で、なぜ自治管理の分野を拡げようとするのか、ということである。それは自治管理の目標を問うことである。

（注）1、ここでは内乱中のスペインにおけるものとアルジェリアにおける自治管理とは問わないこととする。

2、これらの協同組合は生産労働者協同組合連盟（パリ第八区クールセル街八八）に連合している。

3、これらの共同体は共同体協会（パリ第一二区クール・ド・パンセンヌ七二）に組織されている。

4、“企業複合”（モンルーユ市ロマンヴィル街一七九）。

二、もう一つの社会

当初二つの型の自治管理は、その理論家たち、創始者たちによって、新社会の計画実現への単なる手段と見なされていた。ユーゴスラヴィアの自治管理は、共產主義社会を実現する目的を持っていた。協業自治管理の起源は、労働者提携組織による社会組織化の一八四八年の広範な計画と密接に結びついている。同様にイスラエルのキブツミック、モシャヴニックにとって、彼らの農業集落における自治管理は、ユダヤ人の社会主義国家の下準備でしかなかった。

さまざまな理由から、それらの新社会の計画は実現することができなかった。私はほかの場所で——結局それらの経験の動機となった社会主義イデオロギーは、発展を実現するにあたって、大衆を組入れる技術になり終ってしまったのではないかと、質問を提起したことがある。事実、新社会主義組織は陽の目を見ず、それらすべての経験は、次のような二つの機能を持っていたことが指摘されている。

①第一にそれらは新社会への信仰によって、出発のため、ついで彼らの企業強化のために、各個人の強力な動員を実現した。それらは自発的な、ないし低い報酬の労働時間による犠牲を生んだ。その結果固定資本が生みだされた。三つの経験の中に確認される所得についての平等主義は、それが許している消費の制限のために、結局生産投資の創出のためにしか貢献しなかったのではなからうか、産業革命期のイギリスの清教徒的な禁欲精神にやや似た形の社会主義の理想は、剰余価値を生み出す一手段でしかなかったのではなからうか。

②第二に、それらの経験は、関係者一同の集団的向上を目的としていたにもかかわらず、三つの事例の中では、他の人びとの上に立つ人びとが現われるのが見られなかったであろうか。ユーゴスラヴィアの自治管理は、次第に自由化を望まれている経済にあっての、企業主たちを創出する役割しか持たなかったのではないだろうか。社会主義協同組合は、社会主義の墮眠と闘わない企業家ないし社会主義貴族をしか生まなかったのではないか。そしてイストラエルのキブツは、それを生んだ自治管理の発展よりは、アメリカの援助を募ることに心を奪われている政治家を生んだだけで

はなかったのか。したがって社会主義の理想は結局、社会的昇進の手段でしかなかったのではないか。また自治管理の経験はこの上なく適切な選別の方法ではなかったのか。

社会学上のある種の機能主義が生み出したこれらの質問は、第三者的立場の観察者にとっては心地よい説明に到達しうる。同じやり方で、学生の不満を就職口の不足のせいにし、人間関係を十分考慮した計画によって労働者の自尊の必要を満足させることを提案し、現在の自治管理の社会主義への渴望を低く評価しようとすることは、近年の流行であった。それは社会学者を満足させるし、多分計画化論者をもそうであろう。しかしそれは仕事やよりよい賃金や工場や事務所の中で親切さ以外のものを求め、それを求めていることを叫んでいる人びとにとっては（たとえそれらの仕事や賃金や親切さが、さしあたって満足すべきものであったとしてももちろん）何らの意味をも決して持つものではない。

改めて探さなければならぬのである。自治管理は実際、社会を変革しようとする意志に従属しているものであり、きわめて強力なイデオロギー的企てであることを無視して理解しうるものではない。ここに示したあらゆる経験の中では、自治管理は、社会変革の計画の、唯一ではないがおそらく主要な部分である。企業の中につくられた諸委員会を始めとして、すべての社会機構は構想されているのであって、その社会機構の中で各企業の年次計画は最高機関に提出され、全国計画の中で総合されるのであり、そこではさまざまな社会勢力は同じ方法であらわされている。

ひとりユーゴスラヴィアのみが、そのような機構をととのえたのであり、そこでは権力の地方分権化から必然的に生じた速心力

が、共產主義者同盟の活動組織機構によって実現された根深い統一によってつくなわれているのである。しかしながら西欧の消費社会の影響下で、このイデオロギー的企ては最近数年間緩んできており、自治管理の機能は、その機関を格別改善することもなしに貧血状態となっている。各個人がもはや新社会創造の可能性を信じなくなるや否や、ベルグラードの指導者たちの言葉によれば、豊かさへの競争、に専念するや否や、活動家精神、自治管理機関の参加が要求する時期的労力的な犠牲は減少する。機構は存続するが、生きた内容は失われる。

そのことは、自治管理は稀にみられる制度でしかない、豊かな社会では、不可避的に貧血状態になるといおうとするものではない。そうした豊かな社会は、まだどこにも存在しない（アメリカ合衆国においてすら貧乏人はおそらくわれわれの国よりも比較的数量多く、物質的にも精神的にも貧しい）のみならず、物それ自身以上に告発されているのは消費の仕方なのであり（物に結びついていいる威信、その社会的差別の役割）、われわれを屈伏し悩ませている絶えざる広告なのである。トランジスターを手放さなかった最近数週間、齒磨の間抜けたコマージュに心から悩まされなかったものがあるか。また学生デモ——それについて好きなように考えることはできるが、それがもう一つの社会の探求を表明していたことを否定することはできない——の報道を、誰がやたらと切ったりしたろうか。われわれの中の何びとが、（左翼のものを含む）週刊誌の中に、それらすべての《奥様向け週刊誌》の類（複数、それらは受けているから）が便利なものへの熱狂的な競争について行っている記事と、社会への批判とが、隣合せに

なっているのを見て、何かしらの恥かしさを覚えなければならぬ。さて自治管理のあらゆる要求と機能がと正面から対立するもの、それはこの消費の風土であること、それをいわねばならない。しかも自発的に最近の自治管理の要求は消費社会の否定と結びついていた。物それ自身が告発されたわけではないが、しかし、それらの礼拝、司祭、典礼が告発されたのである。

だが自治管理の要求と同様、この消費社会の否定が、すでにこの消費を味みし、次第にその空しさを知った環境から出発していることは多くの人びとの見るところである。そこに到達した労働者大衆のみが、それにあのように反対している。その意味で、C G Tのような中央の単なる要求の態度は、それがあまり想像力のないものだとしても、その構成員の要望とよく一致していることを示している。

自治管理の要求はまた、どこでも生れたわけではない。前世紀の原子説資本主義の旧協同組合は当時の技術過程を支配し、その要求は当然管理面に及んだ専門的労働者に推進されて排他的に飛躍を見せたのである。同様に現在の自治管理の要求も、大規模な資本主義の中堅幹部、ないし将来の中堅幹部、代理人ないし将来の代理人から生まれている。快適の生活水準の享受者である彼らの要求は、管理的なものでしかありえないのである。

さて、首尾一貫したものであるためには、そうした要求は当然より広汎なものであり、政治的なものとならざるをえない。政治的というのは企業管理における資本の力に対立するからであり、唯一の型と見なされている文明のある形態に対し敵対するものだからである。しかしながら進行中の《文化革命》の運命がどうで

あれ、現に各企業全体に自治管理が波及する条件が満たされてい
るとは思われない。われわれはただ、自治管理の課題と探求とが、
企業の限られたグループによつて改めてとりあげられ、経済的に
有力な、自治管理の機能において模範的な、自治管理の分野の創
造を目的とすることを希望しうるのである。それに各政党や組
合・中央部が、それについて考えたことがないわけでもなく、それ
らの構成員は次第に自治管理の分野を強化しうることであろう。

眞の自治管理の代りとして、人びとがおそらく問題とするであ
らう参加の、あるいは共同管理の諸形態についていえば、新しい
カテゴリーの貴族が握るであろう指導によつてであれ、数年来設
置された大学調停委員会がすでにそうであつたように、権力ない
し世論に見棄てられるか知られないかするからにせよ、貧血状態
になることをわれわれは怖れる。参加の制度が弱体化し、ゆつと
りと死ぬことは、實際現在の風土の論理的帰結である。消費の風
土は、それに寛容ではない。広汎に参加すること、結局それはお
そらくより少なく消費することではない。しかしそれはより・聡明
に消費することを願うことである。

そしてその聡明さ、その消費についての規制こそ、われわれが
入りこんでいる社会の型、われわれが盲目的に模倣しながら挑戦
に应じようとしている、アメリカ型とは両立しがたいものなので
ある。

三、ゆつくりと、だがより幸福な形で成長

ここでまたわれわれは、ユーゴスラヴィアの経験を想起できよ
う。企業がその機構を変えているにもかかわらず、大学教育の科

目と方法は、学生たちがすぐにうんざりしてしまつたあのマルク
ス主義の数多くの講座を除くとすれば、いわば関心を示していな
い。それがよき中堅幹部や専門家をその学習方法によつて生みだ
しているとしても、大学は自治管理機構との対話を、討論を、そ
の鼓舞を準備してはいない。討論の実践は権威と莊重さを持つ授
業の中では学ばれるものではない。

自治管理の機構は實際、絶えず活気づけられ鼓舞される必要が
ある。というのも、あらゆる制度のように老衰や硬化に襲われる
からであり、それに及ぼす外的な圧力ないし脅威と関係のない場
合ですらそうである。さて、参加と参加の機関を活気づける方法
の探究と実験は、常に大学以外でなされてきたことを確認しなけ
ればならない。大学は自治管理への専念とその目録とを、輕蔑さ
えしながら人文科学の副産物と見なしているし、遠く離れたまま
知らぬ顔をしている。というのも大学は、対話ないし参加と呼ば
れるものすべてが、實際には告発し異議を申立てるものであると
感じているからである。

大学における学習の權威主義的な方法と機構の変革の意志が、
自治管理への要求と同時に生じたことはしたがつて偶然ではない。
もしそうした大学の方法と機構とが変えられないものならば、企
業レベルでの自治管理は、あらかじめ形式的な参加にしかな
らないよう余儀なくされている。それは二つの要求の単なる出會
いの問題ではなく、社会改革の二つの補足的な面の出會いなので
ある。労働者と学生の同盟が単に戦術ではないのは、この意味に
おいてである。

更にいえば、若干の部分的な改革と補足的な資金の投入を除け

ば、大学はその社会における役割が変わらないとすれば、改めて転覆させる必要はないということもできる。大学が農業社会の争点を解決するために弁護士と公証人を養成した数世紀ののち、(ブルジョアジーの企業は未発達でまだ彼らの管理のために人材を必要とはせず、彼らの宝物である)学者と哲学者とを大学が養成していた時期ののち、今や大学は大企業の要求を十分受入れるにいたった。ごく最近までの大学と産業界の名高い対話が帰するところはずつとそれであつた。

だが産業界を告発し、文明を方向づける権利を産業人に与えることに異議をはさむもの、それが大学となつて以来、事態ははっきりと変つた。

この新しい視点の中で、大学は新しい役割を引受ける。大学はもはや単なる中堅幹部の供給者であるのではなく、経済や社会の動向の批判者である。大学はもはや単に社会的現実の分析者ではなく、その現実に関与することを望む政治勢力である。大学は人文科学の中で通常のもの、法定のもの、既成のものよりは、改革的なもの、激しているものに注意をそそぐ。その方法の中で大胆な革新のおかげで、その教育と研究は、専門家や技術者のみではなく、社会の各企業の自治管理機構の活動家をも準備する。

ここで『進歩』という古い言葉を改めて用いることを許された。結局、われわれの豊かな脱工業化社会によって永遠に忘れられていたにもかかわらず、われわれ社会学者だけは考えていた数多くの言葉とテーマとが、ここ数週間のうちに再発見されたのではなからうか。そして進歩という言葉は、発展という言葉よりは私にはずっと豊かに見える。発展が単にある経済的成長のみなら

ず、教育や健康などの水準の上昇をも意味するとしても。こうした言葉はすべて指数であり、量であり、数である。それに反して、今日の根本的な要求は、すでに示した輕蔑の拒否だけではなく、われわれに課せられるものを理解する権利、ノンという権利、幸福である権利だと私には思われる。確かに経済と社会の発展のみでなく、人間の進歩、晴れやかさが求められているのである。

私は生産性という意味では、自治管理の経験は私企業よりも効率的ではないとのべた。しかし効率のみが重要なのであろうか。もしそのかたわらに、労働についての理解ないし関係者たちの必要の表明という他の価値をおいてみるなら、効率において、生産高において失われたものは、多分人間の進歩の中でつぐなわれると考えられないであらうか。

もちろん国家におけるように、企業においても議会や組合その他の対話を通してよりは、命令によって規則を決めることの方が素早い。しかし素早さのみが重要であらうか。しなければならぬことを命令されながら人間の生活水準を高めることの方が多分素早いとしても、一方、人は討論をしながら人間をより進歩させないものであろうか。

したがって再検討すべき(今日の抗議者によっては告発されない)発展や拡大を超えて、われわれの従うべき規範が存在するのではないか。われわれが劣っていることを恥しく思わねばならず、化粧石鹼の製造者たちがより一層のいらだたしい世論を喚起することに努めるのは、アメリカ合衆国やE.E.C.の若干のわが隣邦諸国が、国民所得の高い比率を宣伝に用いるからであらうか。アメリカ合衆国に特有の諸条件が、公衆の中での株式会社活動

にかなり広汎な寄与をもたらしているから、われわれは金の力への異議が常に強力な国にいるのに、それを真似ようとしなければならぬのであろうか。アメリカ合衆国は個人的な成功に結びつく社会的移動性しか知らないから、われわれは共同的な向上を可能とする制度に関心を持つこと、ないしそれを生じさせることをなおざりにしなければならないのであろうか。

以上のようなものが、自治管理の核心にある諸問題のうちのいくつかである。私が示そうとした自治管理は、われわれの社会とその諸制度の目標についての、言葉の広い意味における政治的なより広汎な考慮から切りはなすことができない。生産性についての望ましからざる若干の傾向と均衡を保つために、自治管理は更に必然的に自由主義制度の計画よりも強制的な全国的計画化の方式の中に組入れられなければならない。(部分的な参加や共同管理などの)自治管理よりもゆるやかな、革新的でない参加の計画の導入は、それらの新しい方式が少しでも下心なしに設立され、人間関係について少しでも曖昧な計画以外のものとして生きるとすれば、それらもまた必らず根底的な問題を提起せざるをえないのである。

確かに完全な環境におかれていようと、生き生きと機能していようと、それらのさまざまな参加の制度は、衰えることで、有効なという外面をもって語るであろう名士をつくることで、終ることであろう。それは数年の間は、おそらくは十年ないし二十年は存在するであろうが、やがて別のものを見出さなくてはならないのであろう。しかし、そしてこれは重要な点であるが、それらの参加の諸制度は、あらかじめわれわれの社会に目標を、計画を与

えるのであろう。最近になってのみ冷笑されることなしに改めていいうる方向、より正しい社会の方向へ、社会を進歩させることであらう。

自治管理、これこそ参加の諸形態のうちの生粋のものであるが、それはかくして真の己の位置、新社会への計画の手段としての位置を見出す。自治管理のために、われわれは成長の過程でよりゆるやかに進むことであらう。しかしおそらくはより幸福なことであろう。自治管理のためにわれわれは、今日同様あらゆる新製品を消費することはしないであらう。しかしわれわれは、自分固有の生活をよりよく営むことであらう。それは、何がよいのか、わるいのか、はつきりわからなくなっている今の世界においても、ともあれ大変わるいというものはあるまい。人間は生きるためにつくられたのであつて、生きることを準備するためではないとのべる時、おそらくジバゴは正しいのである。

(編集部付記)

この訳文は、『現代アナキズム研究』第三号(現代アナキズム研究会 一九六八年)に掲載されたものの再録である。

この原文は、フランスの五月〜六月の経験の直後、アルベール・メステルが七月半ばすぎから八月初めにかけて、『ル・モンド』紙上に連載したもので、原題は *L'autogestion: pour quoi et comment?* である。

著者のメステルは、まだ四〇才になったばかりの少壮の社会学者で、スイス人であるが、イスラエルのキブツ、ユーゴスラヴィアの自治管理などの研究で知られており、(四四頁に続く)

急速に広まった時代、フランスのエスペランティストにあてたもの。ザメンホフの思想「人類主義」の形成、エスペラントの改造問題を理解するうえで重要である。日本語訳はまだない。

このなかで、ザメンホフの生涯と思想を知るうえで、もつとも基本的で重要なものは、つぎの二つの手紙です。

a、ボロヴコへの手紙（一八九五年）——エスペラント誕生の歴史を中心に書かれています。もつともよく知られているもので、しばしば伝記などに引用されます。

b、ミショーへの手紙（一九〇五年）——ユダヤ人であることと自己の思想形成との関係、また自己の経歴を簡潔に述べています。ザメンホフの思想の源泉を知るための、もつとも重要な文献であると言えます。

さて、ラザール・ルドビーコ・ザメンホフは、一八五九年十二月十五日、ロシア領ポーランドの町ビヤリストックの、ユダヤ系の語学教師の家に生まれました。この年の土地、この家に生まれたことが、のちのザメンホフに、世界語の創造をおもいたさせ、これを成功に導びいたのでした。そ

お詫び

連載中の「金宗鎮伝」は訳者の都合により今回は休載いたしますので、御了解下さい。

ここで、私は、つぎの三つの視点からザメンホフという人物をとらえ、同時に、エスペラントへの影響を明らかにしようとおもいます。

- 1、東欧のゲットー出身のユダヤ人であり、せまい民族の基盤よりも全人類を中心に考える予言者の伝統をもつユダヤ精神のなかに育ったこと。
- 2、多くの言葉を学び、人間の言葉を愛していたが、言語学上の専門的なことはほとんど知らない、終生無名で良心的な眼科

医であつたこと。

- 3、あらゆる事柄につねに謙虚な態度でのぞみ、道理をつくして他人を説得しようとした真の民主主義者であつたこと。

これらは、それぞれ、a 思想としてのエスペラント、b 言葉としてのエスペラント、c 運動としてのエスペラント、に決定的な影響を及ぼし、全体としてエスペラントに「生きる力」を与えた、と言うことができるところ。

（つづく）

（三四頁より続く）

著作には、一九六四年刊行の名著『社会主義と自治管理——ユーゴスラヴィアの経験』などがある。

六八年のフランス五月革命は、生産性、合理化、アメリカ化といった理念と対立的に、われわれが長くうち忘れていた自治管理の理念をクローズアップさせるといふ役割をはたした。以来フランスでもわが国でも、かなりの人びとが自治管理について関心をよせ、発言をしはじめている。

メエステルのこの論文は、五月革命の直後にまとめられたものであり、小文ではあるが、的確にかつ簡潔にしかも示唆的に自治管理について語っており、一参考資料としてここに紹介した。